

PHYSOR2018に参加して思うこと

近畿大学原子力研究所 橋本憲吾

炉物理国際会議 PHYSOR2018 が 2018 年 4 月 22 日～26 日の日程でメキシコ合衆国カンクンにおいて開催された。この国際会議は、隔年毎に、米国原子力学会 (American Nuclear Society) の炉物理部会 (Reactor Physics Division) が開催する会議であるが、米国外で開催されることも多く、その場合は現地の学会が実質的な運営を行う。PHYSOR2014 は本部会が担当し、今回はメキシコ原子力学会 (Mexican Nuclear Society) が運営した。Reception や Banquet に学生参加者が出席出来ない等の不満があったが、学生参加費を下げるための措置ということで納得した。学生諸君は、会場のホテル外での会食やマヤ遺跡ツアーと彼らなりに楽しんでいたようである。

この PHYSOR 会議は、炉物理分野の最も重要な国際会議であることは言うまでもない。筆者も、大学院生の頃から何度も出席させて頂いた。若い頃は自らの鍛錬の場であり、老いては院生の成長を測る場でもあった。特に、院生にとっては、刺激的で厳しい修練の場であり、将来、研究者や技術者としての貴重な糧になるものと確信している。この観点からすると、今回の PHYSOR2018 への国内院生の参加者は 2 大学 3 名と大変心細くなるような惨状であった。これとは対照的に、中国からの若手研究者や大学院生の参加者は驚くほど多く、国力と研究者の意識の差異を見せつけられるようであった。

今回の PHYSOR への院生出席者の低調さのみならず、学会の年会・秋の大会への院生・学生の発表者が近年減少傾向にあることが心配の種になっていた。この責めは、本人達ではなく、年長者である教員にあることは言うまでもない。学部 4 年から学会発表を重ね、M2 までには 1 度は PHYSOR や M&C で発表することが私たちの若い頃の院生の目標であったではないか。ふと、そんなことに想いを馳せた会議であった。

筆者が所属する大学院専攻の院生は、修士課程の 2 年間で学会発表を最低 2 回行わないと修士の学位申請を行えない仕組みを導入している。従って、大半の院生は半年に 1 回の頻度で学会発表することを当然のことと受け止めている。原子力学会フェロー賞等の獲得を窺う院生は、差別化を図るためにも、国際会議の発表に熱心である。このような「ムチと飴」の仕組みについては異論もあると想像するが、筆者としては何もせず手をこまねいては居られなかったのである。本部会が実施している国際会議旅費の補助も、すばらしいシステムであると考え。今後も継続して欲しいと希望する。将来のある若者のために、若くない者は、今後も試行錯誤しながらも良い方向を目指そうではないか。